スパルタ王クレオメネス一世とその時代

新村祐一郎

今日若干の研究者は、スパルタ王クレオメネス(Kleomenes)一世の政治家としての資質について論じ、とくに彼の対外政策の評価をめぐって論じている。筆者は先に紀元前六世紀後半期におけるスパルタの対外政策について概観したが①、その際クレオメネス一世の治世については前六世紀と五世紀に跨るためにその後半には充分触れずに終っている。本稿ではその欠を補うことを考慮して、改めてクレオメネスの治世についていささかの考察を加えたい。

一

クレオメネス一世が王位についたのは五二〇年頃〔以下、年代はすべて紀元前(B.C.)であるが「前」または"B.C."の標記を略す〕である。彼はアギス家(Agiadai)の王アナクサンドリダス(Anaxandridas)の長子として生れた。アナクサンドリダスの約四十年に及ぶ治世はエーゲ海の対岸小アジアにペルシアの勢力が及び始めた時代に当り、彼はペルシアがエーゲ海上に進出しないようサモス島やエジプトと提携していた。特にサモスの強力な海軍(Hdt. III. 39)に期待していた。だがサモスの僭主ポリュクラテス(Polykrates)に親ペルシア的行動があったので、スパルタはサモスを攻撃したがこれは成功しなかった(Hdt. III. 54-59)。当時エーゲ海の制海権はサモスとスパルタとナクソスによって保有されていたと考えられるが②、サモスがペルシアの勢力下にはいると、ペルシアの力がエーゲ海に及ぶことになる。これが現実となったのは五一七年である。つまり、クレオメネスが即位した頃からペルシアの影響力がギリシアにより

直接的に及ぶようになったといえる。彼の治世は約三十年であるが、その三十年を三期に分け、第一期は即位から五一一乃至一〇年に至る期間、第二期は五一一乃至一〇年から四九九年に至る期間、第三期は四九九年から退位乃至死亡するまでの期間とすることができる。

第一期はほぼ前王アナクサンドリダスの政策を継承しながらも、ペルシアに対する防衛の主眼を海から陸へ転じた時期である。エウヒビオスの Thalassocracy-List によると制海権がスパルタの手にあったのは五一七年―五一五年の間であり、それ以前がサモス、それ以後がナクソスとなっている。[3] この頃からペルシアがエーゲ海に進出してきたのである。しかしスパルタはすでに前王アナクサンドリダスの時代からペルシアの威力を熟知していたので、海外に派兵してまでペルシアと戦うことは考えていなかった。五一七年にサモスの独裁者マイアンドリオス（Maiandrios）がペルシアに攻撃されてスパルタに逃れ、クレオメネスの援助を乞うがクレオメネスはこれにとりあわず彼を追放している（Hdt. III. 148）し、五一四乃至一三年スキュティア人がペルシアに攻撃された報復を行うためにスパルタの協力を要請した（Hdt. VI. 84）際にもこれに応じた気配はない。すなわちクレオメネスは可能な限りペルシアとの対決を避け、スパルタの軍事力を温存しようと考えたのである。これはペルシアがギリシア本土を侵攻する可能性を考えた上での方策であり、それまでは極力軍事力の消耗を抑えることを目ざし、同時に、その準備期間を出来るだけ長期化しようという意図も読みとれる。しかしスパルタは独力ではペルシアと対決ができないことを心得ており、そのために他国がこの方針に同調することを期待した。これらの国々が合従した隣保同盟を結成してペルシアへの備えとすることを目指したのである。しかしそのためにはスパルタに次ぐギリシア内の国家であるアテナイを同盟に加えなければならない。そのアテナイとの交渉がスパルタ外交の基本に据えられたのが第二期である。

二

スパルタ王クレオメネス一世はペルシアに対する防衛線を後退させ、ギリシア本土内部における覇権を確立するための努力を始めるのは五一一年頃からである。彼のアテナイへの干渉はこの国がアルゴスと結んでスパルタに反抗的態度をとる可能性を除去するためであった。

スパルタは僭主政をとっている国家に干渉して僭主を追放するというのが、六世紀中頃のエポロスであったキロン

(Chilon) 以来の国是であったが、[4] 当時僭主政をとっていたアテナイも当然その対象となった。アテナイの政界ではメドンティダイ (Medontidai) と同系の後裔と自称する (Hdt. V, 65) ペイシストラティダイ (Peisistratidai, ペイシストラトス家) とアルクメオニダイ (Alkmeonidai, アルクメオン家) とが常に対立する党派であったが、このうちペイシストラティダイは六世紀後半から政権を獲得し、僭主政を樹立した。五二七乃至二六年にペイシストラトス (Peisistratos) が死去すると二子ヒッパルコス (Hipparchos) とヒッピアス (Hippias) が継承したが、事実上ヒッピアスが僭主として支配した。この間アルクメオニダイとその同調者は国外にあって僭主政打倒の機会をねらっていたが、その指導者のクレイステネス (Kleisthenes) は僭主政を好まないスパルタの勢力を利用して、これと協力しながら五一一乃至五一〇年にヒッピアス追放に成功した。[5] ピッピアスは小アジアのイリオンに近いシゲイオン (Sigeion) に退去した。スパルタのクレオメネスはその後アテナイに親スパルタ的な政権が成立することを期待していた。アテナイでは多くの貴族に支持されたイサゴラス (Isagoras) とアルクメオニダイのクレイステネスとの政争があり、イサゴラスが政権を得たが、[6] クレイステネスが民会に提出した民主政を目ざす改革案が通過したため、イサゴラスは不安を感じクレオメネスに来援を求めた。そこでクレオメネスはイサゴラスを援助してアテナイに親スパルタ政権を樹てさせる好機と考えて若干の手兵を率いて来援し、イサゴラスの政敵クレイステネスとその一派を瀆神の理由で追放したが、アテナイの民衆はこれに反感を抱き、クレオメネスとイサゴラスをアクロポリスに包囲した。そこでクレオメネスとイサゴラスはアテナイを撤退し、そのあとクレイステネスが呼びもどされてアテナイの民衆指導者として活躍する。これら一連のできごとによってクレイステネス支配下のアテナイは反スパルタの態度を明確にしたことになった。そこでアテナイはスパルタとの対決を予期しペルシアとの同盟締結を目ざしている (Hdt. V, 73)。すなわちアルクメオニダイはスパルタに対抗するための手段として異民族との提携を考えているのである。彼らがもしペルシアを他のギリシアのポリスと同列の存在と考えていたならばこれは認識不足という他はない。しかしクレイステネスほどの政治家であればペルシアと同盟を結ぶための条件が如何なるものであるかを知っていたのではなかろうか。それにもかかわらず同盟締結を求めたのであれば、単にスパルタとの対決だけでなく、ペイシストラティダイとの勢力争いの面でペルシ

アの庇護を受けてでも自家のアテナイにおける支配権を確固たるものにすることを目ざしていたといえよう。ギリシアからの使節に対して、ペルシア側は「ダレイオス王に土と水を献ずるならば」という条件をつけた。交渉に当った使節はこの条件を受けいれたものの、アテナイ側も同盟の相手としては不相応と考えたのか結局同盟関係にはいった形跡はない。これはクレオメネスにとっては捨ておけぬところであった。ギリシア内のポリスでペルシアと交渉を持つものはスパルタの方針と対立することになるのみならず、ペロポネソスを中心としアテナイを含む中部ギリシアまでの統一体を結成してきたるべき外国（ペルシア）勢力に備えようというスパルタの計画が実現不可能となるからである。クレオメネスはアテナイにスパルタに同調する政権を樹立する必要を一層強く感じ、アルクメオニダイの支配を打倒して以前これと対決したイサゴラスを担ぎ出し目的を達成すべく圧力をかけた。すなわちボイオティア、カルキスにアテナイを攻撃させ、自らはペロポネソスの諸国軍をひきいてアッティカに侵入した。しかしエレウシスでペロポネソス軍内部に意見の不一致があり、しかもスパルタのエウリュポン家(Eurypontidai)の王デマラトス(Demaratos)もクレオメネスと別行動をとったため侵攻は失敗し、ボイオティアやカルキスの軍もアテナイ軍に破れた（Hdt. V. 74-77）。このためアテナイのアルクメオニダイの政権は安泰であったが、これはクレオメネスとイサゴラスの提携に対抗してデマラトスがアルクメオニダイと連絡をとっていたという推定もあり得る。[7] しかし確証はない。

更に二年後（五〇四年頃）にスパルタは自らの手で追放したヒッピアスを招き、ペロポネソス諸国の同盟会議で彼をアテナイの支配者に復位させることを提案した。これはクレオメネスが僭主政打倒の行動をおこすに際してアルクメオニダイにあざむかれたことが明白となったことと関連があり、そのためにアルクメオニダイに対する報復という意味もあった。ペイシストラティダイは本来スパルタと親密な間柄にあったことをヘロドトスは二回にわたって言及しているが、それにもかかわらずヒッピアスの追放に動いたのはデルポイのアポロン神殿の巫女ピュティア(pythia)の託宣があったために他ならない。しかしその託宣がアルクメオニダイの陰謀であったことが明らかになったので、いわば、アルクメオニダイは陰謀によってペイシストラティダイから政権を奪ったことになる。したがってスパルタにとっては陰謀が明らかになった現在単なる報復だけではなく、アテナイの政権は当然ヒッピアスに返還されなければ

ならないと考えられたのである。以上のような理由でスパルタはヒッピアスの復位を企図しているが、クレオメネスの真の狙いはスパルタの全面的な支援で彼を復位させ、アテナイにスパルタと同調し得る政権を樹立するというところにありイサゴラスの場合と同様である。しかしこの計画はペロポネソス同盟諸国の賛成が得られず実現されなかった（Hdt. V. 90–92）。

以上のクレオメネス一世の行動を見ると、最初のヒッピアス追放は、ペイシストラティダイとの親密さという私情を捨て、僭主政打倒というスパルタの方針に副うものとも理解できるが、イサゴラスの場合やヒッピアスの復位を目ざすのはいわば独裁政を復活させようという意図から出ている。スパルタ人の目から見て「アテナイ人は独裁政の下にある限りは無力で柔順であるが、解放されるとスパルタ人に対抗するだけの力に成長する可能性がある」（Hdt. V. 91）ならば、スパルタにとっては独裁政をとらせておいた方が得策である。[8] この点は僭主政打倒の国是には相反するが今や民主政を標榜するクレイステネスの治下にあるアテナイはスパルタから見れば好ましい存在ではなかったに違いない。もっとも、ペイシストラトスの独裁権獲得の方法は僭主のそれに他ならないが、独裁政そのものは必ずしもペイシストラティダイに限ったわけではなさそうである。アルクメオニダイとペイシストラティダイとはことごとに対立していたが、すでにペイシストラトス自身の時代に一時的ながらクレイステネスの父メガクレス（Megakles）と協調している（Hdt. I. 59–60）。

もちろん両者の政策プログラムは異なっていたので永続的なものではなく、対立し互に追放し合うような形になった。しかし、またヒッピアスが二代目をうけついだ直後の五二五乃至二四年にクレイステネスはアルコンに就任している。[9] このように両家は基本的には対立していながら、時に応じて妥協乃至は和解している。したがって、ヘロドトスは随所で[10]アルクメオニダイが「独裁者嫌い」（Misotyrannoi）であると強調するが、メガクレスにしてもクレイステネスにしても、行動にはかなり独裁者的なところがあり、「独裁者嫌い」という一種の宣伝文句は結局ペイシストラティダイ支配の打倒を指しているのである。要するに両家間の勢力争いに過ぎない。

ところでヒッピアスはスパルタの提案がペロポネソス諸国の賛成を得られなかったのでスパルタを去ったが、そののちマケドニアやテッサリアの好意をも受けずシゲイオンに帰った。ヒッピアスはそれ以後ペルシア帝国に働きかけ、

アテナイは自身とペルシア王との支配下にあるべきことを力説し、暗にペルシアの力によってアテナイの支配権を回復したいことを示した。このような動きを知ったアテナイは前五〇三年頃二度目の使者をペルシアへ送ってヒッピアスの言動に乗ぜられないよう勧告したが、それに対するペルシアの返答は最後通牒ともいうべきものでヒッピアスをアテナイの支配者に復帰させることを要求するものであった。アテナイ政府はこの要求を拒否したので、事実上アテナイは一転してペルシアに敵対することになった。[11]

これによってアテナイは非常に困難な状況に直面した。すなわちスパルタもペルシアもともにその目的は異なっているもののヒッピアスの復位をもとめているからである。しかしアテナイとしては僭主政を廃して民主政を成立させたという意識が強いのでヒッピアス復位には同意できなかった。このような事態に際会してアテナイ政府は如何なる手段をとったのであろうか。Walker は第二回のペルシア遣使からの返答を聞くまではアルクメオニダイは親ペルシア派であったが、それ以降も親ペルシア派として残ったのはヒッピアス派のみとなったという。[12] しかしそれまでの国政の指導的な役割をもっていたと思われるアルクメオニダイが事態を切迫せしめた責任を追及されずに終ったであろうか。それと関連して思い出されるのはクレイステネスの名は彼が民衆指導者となった時点から間もなく（五〇五年頃）消えてしまったという事実である。その間の事情についてヘロドトスもアリストテレスも何も説明していない。Klein は五〇六年から四九三年の間の一時点においてアルクメオニダイの支配力が弱体化したと推論しているが、[13] それはむしろ弱体化というよりも失脚したと見るべきではなかろうか。クレイステネスの名が文献上に現れなくなったのはそのためと思われる。ところでクレオメネスの対アテナイ政策が五〇四年のヒッピアス復位の不成功以後、あまり積極的ではなくなっている。アテナイがペルシアと友好的であれ敵対的であれ交渉せず無関係であることがスパルタにとっては必要であり、そのようなアテナイをスパルタにひきつけて自らを中心とする同盟の一員に加えるのが彼の対アテナイ策の基本であり、それがクレオメネスの対ペルシア政策を完成させるものであったのである。ところがアテナイはクレイステネス政権以来ペルシアとの交渉を断続的に行っているのでスパルタはそれを断ち切る方策をとってきたのであるがいずれも不成功に終った。しかしアテナイがペルシアと厳しく対決するに及び、この状況でスパルタ中心の同盟にアテナイを加えるならばスパルタもペル

シアと対決せざるを得ない状況が現出する可能性が濃厚なので、クレオメネスはアテナイとの交渉を断念したのである。しかしながら反面アルクメオニダイが失脚したならば当然これと対立するかつてのイサゴラス派（＝貴族派）が勢力をもり返すことが考えられる。貴族派は僭主政が倒れたのちは一貫して親スパルタの姿勢をとり続けていたので、クレオメネスとしてはこれを倒す必要はなかったが、同時に同派は圧ペルシアの態度であるので同盟に加えるべき相手でもないと考えられたのである。

しかし、より決定的であったのはいわゆるイオニア反乱に対する態度である。六世紀後半ミレトスはペルシア帝国に臣従する僭主ヒスティアイオスの支配するところであったが六世紀末には彼はスーサのダイレオス王に抑留されていたので代りにアリスタゴラス（Aristagoras）が支配していた。そのアリスタゴラスがサルディスのサトラップであるアルタプレネスを通じてダレイオス王にナクソス島の攻略を建言し、全面的支持を得てこれを実行に移したがナクソスの頑強な抵抗にあって攻略できずに引きあげた。そこでアリスタゴラスはアルタプレネスとの約束を果せず、その結果ミレトスの支配権をも失うのではないかという不安に駆られ、またヒスティアイオスの勧めもありペルシアに対して反乱を起こすことに決したが、その際イオニア各地の僭主に声をかけて協力を要請した。[14] 彼らは独裁体制を廃して民主政を実施するなどの方針を定めた。その上でアリスタゴラスは強力な同盟国を求めて四九九―九八年にギリシア本土に旅立ち、まずその軍事力をもってきこえたスパルタを訪問し、クレオメネス一世に同盟締結を申し入れた。しかしクレオメネスはペルシアの首都が海岸から三ヶ月かかる距離にあることを聞くとこれを拒否してアリスタゴラスをスパルタから去らせた（Hdt. V. 49-51）が、これは元来のクレオメネスの対ペルシア政策から考えて当然であった。次いでアリスタゴラスはアテナイを訪ねて同じく援助を求めた。これに対してアテナイの諸党派は如何なる反応を示したであろうか。ペイシストラトス支持派はヒッピアスのペルシア寄りの立場を反映してかアリスタゴラスの要請したイオニア援助に反対の立場をとり、アルクメオニダイ支持派もペルシアとの協調をいまだに望んでおり、したがってイオニア援助に反対した。これに対して積極的にイオニア援助を主張したのはかつてのイサゴラス支持派の貴族層であった。[15] 彼らはスパルタと協調し、ペイシストラトス支持派、アルクメオニダイ支持派とは対立していた。この問題に結着をつけるアテナイの民会ではイオニア援助の

方針が打ち出された。アテナイでは軍船二〇隻を派遣することが議決され、メランティオス（Melanthios）がこれを指揮することになった（Hdt. V. 97）。このことは、アテナイでは当時、旧イサゴラス支持派が有力であったことを思わしめる。しかしこの段階でアテナイは完全にペルシアと戦争状態にはいったことになり、これでクレオメネスは対アテナイ政策を最終的に断念することになったのである。

なおこの際イオニア反乱軍を援助したのはアテナイの他にエウボイア島西岸のエレトリア（Eretria）で五隻の軍船を派遣している（Hdt. V. 99）。

三

クレオメネス一世は中部・南部ギリシアへの外国の攻撃に備えた防衛体制を整えることをこれまで基本としていたが、それにはアテナイの同意と協力が必要であった。そのためにクレオメネスはアテナイを同盟に参加させようという努力をしてきたがそれは不調に終り、アテナイはスパルタの意向とは反対の方向へ進んだので、彼としては新に体制を立て直さなければならなくなった。アテナイの協力が不可能となるとスパルタとしてはペロポネソス半島の防備に重点をおかざるを得ないことになった。これが第三期である。

アテナイの方はミレトス側の他の同盟軍とともにエペソスに上陸し、サルディスに向いこれを占領して火をかけて炎上させたがペルシア側が反撃に出て撤底的に同盟軍を打ち破り、かろうじて生き残ったものも祖国に逃げ帰った。アリスタゴラスは再三アテナイに対して更に援軍を依頼したが、救援におもむいていない。これは前回の救援が成功しなかったからでもあるが、この敗戦で主戦論をとった旧イサゴラス派が批判されたことも充分考えられるところであろう。そしてこれにかわってペルシアとの関係を何とか改善しようという努力があったようである。四九六年にヒッピアスの従兄弟カルモスの子ヒッパルコス（Hipparchos）がアルコンに選出されたことは当今ペルシアの庇護をうける形になっているヒッピアスの身内であることが大きく作用しているであろう。またそれと共にペイシストラティダイにペルシアとの関係改善の期待がかけられていることを裏書きする。しかし四九四年にラデにおけるイオニア艦隊の敗北とミレトスの陥落（Hdt. VI. 18）とによってイオニア反乱は失敗に終ったのでアテナイでは関係改善が不可能となり政策変更をせまられることになる。

一方スパルタは丁度その頃アルゴスと対戦していた。ア

ルゴスは古くから隣国ラコニアと何度も争っており五四六年頃にもアナクサンドリダスの治世に両国の境域にあるキュヌリア地方をめぐって両国が戦争を行い、ラコニア（スパルタ）の勝利によって、同地方がスパルタの支配圏にはいっている。これによってスパルタは事実上ペロポネソスの覇者たる地位に立ったが、アルゴスは常にこれに対決する姿勢をとり、六世紀後半にスパルタを中心として次第に形成されていくペロポネソス同盟にも加盟する意志をもっていなかった。そこでクレオメネスはアルゴスがペルシアに接近することを恐れ、またペロポネソスの覇権をめぐってスパルタと争う可能性のあるのはアルゴスのみという点をも考慮して、アルゴスと四九四年頃開戦した。クレオメネスは陸上ルートを変更してテュレアから海路をとってアルゴスの東のナウプリアに上陸してティリュンスに進んだ。アルゴス側はセペイアに布陣してこれに応じたが、アルゴス軍は食事中に不意をつかれて大損害をうけたという。更にアルゴス兵の逃げこんだ国祖アルゴスを祀る神域のある森に火をかけ多数の犠牲者を出した。[16] アルゴス側の損失は大きくヘロドトスは「アルゴスでは男性市民を殆んどすべて失った」（VI, 83）といい、その数は「六千人」（VII, 148）としている。しかしクレオメネスはアルゴスの兵力は殲滅したが、アルゴスの市は残した。これは彼がアルゴスの市を潰滅するのが主目的ではなく、これを弱体化しながらも存続させ、親スパルタ的な傀儡政権を樹立しようと目論んでいたことを思わしめる。かくすることによってスパルタのペロポネソスに対する覇権を不動のものとし、ペロポネソス諸国をスパルタの政策に従わせることができるとクレオメネスは考えたのである。四九九年以来クレオメネスはペロポネソスの防備を主軸とする政策に転換したが、その新体制はこのアルゴスの圧服によってほぼ完成されたといってよいであろう。

以上のようにしてスパルタの外交面ではクレオメネス一世の名声は高まったが、内政面においては僚王デマラトスの影響力も強かったようである。彼がクレオメネスに協調的でないことはすでに五〇六年のエレウシス侵入の際に明らかになっているが、彼はクレオメネスが国外にある時に内政面を牛耳っていた可能性がある。当時スパルタにおいて王の行動はエポロイによって抑制されていたからクレオメネスの外交方針にもとづく活動はエポロイによって承認されていたものと考えることができるが、国内ではアルゴスとの戦争後、アルゴスが占領できたのにそれを実行しなかったとして批判された。彼はこれを宗教的配慮の面から

釈明しそれが認められて告発はされなかった（Hdt. VI. 82）が、これは当時のエポロイがデマラトス支持派によって多数を占められていたことを裏書きする。そこでクレオメネスはエウリュポン家の王デマラトスを廃することを考えるようになったものと思われる。

アテナイの方では四九四年以降政界の再編成ともいうべき動きがあった。テミストクレス（Themistokles）とミルティアデス（Miltiades）の登場である。テミストクレスは旧アルクメオニダイ支持層のうちクレイステネスの改革の際にそれを支持して新たに市民権を得た人々によって支持された。テミストクレスは親ペルシア的傾向のあるアルクメオニダイとは異なり一貫して反ペルシアの態度をとっていたが、四九三年に彼はアルコンに選出されている。一方ミルティアデスはアルクメオニダイのかつてのライヴァルといえるピライダイ（Philaidai）の出身であるが、五二四年にアテナイの僭主ヒッピアスにトラキアのケルソネソスの支配を命じられ長らく同地にあった。しかしイオニア反乱に加わったため反乱鎮圧後アテナイに三十年ぶりに帰りピライダイの指導者として頭角をあらわした。彼は当然反ペルシア派であって、間もなく貴族派のリーダーと目されるようになった。[17] すなわちテミストクレスとミルティアデスとはその支持層は全く異なっていたが反ペルシアという一点では一致していたのである。当時ペイシストラティダイとアルクメオニダイとは反ペルシアの両派と対決していたので依然親ペルシア傾向を持っていたものと思われる。

四九一年にアイギナ島が「ペルシア王に土と水を献ずる」ことを決定した（Hdt. VI. 49）が、これはアテナイにとってもスパルタにとっても重大な事件であった。アイギナは当時スパルタと同盟関係にあり、またアテナイとは五〇六年以来戦争状態にあったからである。アテナイはスパルタに対してアイギナがギリシアを裏切ったとしてその処置をスパルタに依頼した。このことはアテナイがスパルタとの関係を改善していたことを示す。クレオメネスはアイギナの親ペルシア政策推進者を捕えようとしたが、アイギナ側はスパルタ人の総意を示すために二人の王が同行することを求めた。これは裏でデマラトスが画策したためであった（Hdt. VI. 50）ので、クレオメネスはデルポイの巫女を買収してデマラトスを退位させ[18]（Hdt. VI. 65）レウテュキデスを王位につけ、彼がクレオメネスと共にアイギナに赴いて目的を達したが、その逮捕者の処置はアテナイにまかせた。クレオメネスはかくしてペルシアとの交渉を避けている。

ところでクレオメネスはデマラトス廃位の際の陰謀[19]が発覚しそうになったので本国から一度出奔している。このことはスパルタ国内での反クレオメネスの空気がかなり強力となったことを示しており、おそらくはエポロイも反クレオメネス傾向の人物が多数を占めたためと思われる。その理由は思うに彼の独裁的傾向が明確になってきたことに対する危惧の念であろう。これまで王が他家の王を廃位したり退位させたりしたことは一度もなかったからである。彼は国内での支持を失ってテッサリアへ向けて逃亡し、異母弟レオニダスがあとをついだ。クレオメネスは更にアルカディアに移って、アルカディアの反スパルタ感情を煽りアルカディア人を率いてスパルタに侵入しようとくわだてた（Hdt. VI. 74）。これは全く僭主の方法に他ならずペイシストラトスのアテテナイ復帰の際を彷彿とさせるものがある。彼自身デマラトス排除以降は独裁者を目ざしていたとさえ思われる。スパルタ政府はこのようなクレオメネスの態度に驚き帰国を認めたが、ヘロドトス（VI. 75）によると、彼は帰国後狂気となり、自殺したという。

ヘロドトスに基づいてクレオメネス一世の治世を見ると、スパルタの状況の推移については触れるところがきわめて少ない。このことはクレオメネスが外交面で活躍したことを示しているともいえる。

四九〇年にペルシアはイオニア反乱で反乱軍を援助したエレトリアとアテナイとに報復するために軍隊をさしむけた。エレトリアを攻略したのち、アテナイに向ったのでアテナイはスパルタに協力を要請した（Hdt. VI. 106）。しかし事実上はスパルタの援軍が到着する以前にペルシア軍がマラトンに上陸したのでスパルタは戦列に加わっていない。アテナイではテミストクレス、ミルティアデス派の主戦論とペイシストラティダイ、アルクメオニダイに代表される和睦論[20]とが相半ばしていたようだが、結局ミルティアデスの主張に従って対決することになったのである（Hdt. VI. 109-10）。ところでマラトンの戦いの際にスパルタではすでにクレオメネスは力を失っていた。ペルシア軍のアテナイ侵攻でスパルタが援軍を出すのはクレオメネスの方針には反するからである。

四

以上見てきたようにクレオメネスは決してペルシアに対して無策であったわけではない。

総じてクレオメネス一世の時代はペルシア帝国の勢力が小アジアからエーゲ海を渡ってギリシア本土に到達する過

程に当っている。したがってギリシア諸国がペルシアの動向に注目していたが、そのペルシアへの対応は一様ではなかった。スパルタ王クレオメネス一世の対ペルシア政策は、すでにアナクサンドリダスの時代からペルシアの力がよく知られていたので撤底した敬遠策であったといえる。彼は最終的にはもっぱらペロポネソス半島内部をスパルタの覇権の下におき、この地域へのペルシアの攻撃に備える方針に転換したのである。したがってペロポネソスの防備を固め、ペルシアがペロポネソスを攻撃した場合にのみこれに応戦するのがクレオメネスの意図するところであった。

このような彼の対ペルシア外交はいささか消極的に過ぎるように感じられるかもしれない。しかし、このペロポネソスの外の世界に対する消極策はすでに六世紀中葉のキロンによって基礎づけられた体制でもあって、その点に関する限りは彼の方が父王アナクサンドリダスよりもキロンに忠実であった。彼の内政面について具体的には知り得ないが、ヘロドトスは五〇六年まで、アナクサンドリダスの僚王アリストン、クレオメネス一世の僚王デマラトスの行動については何も伝えていないので、クレオメネス一人で政策が決定されているようである。デマラトスは五〇六年に初めてクレオメネスと別行動をとる王として登場し、四九一年にもクレオメネスを誹謗する王としてあらわれている。また五世紀にはいるクレオメネスの権威も絶対的なものではなくなってきている。したがって、内政面ではデマラトスとその支持者がかなり影響力をもったと思われるが外交に関しては退位するまで彼が司っており、それが支持されていたといってよい。

ヘロドトスは全般的に見てクレオメネス一世に必ずしも好意的ではない。近年の研究者の中にはクレオメネスをギリシア内部の関係に終始してペルシアをはじめとする国際関係に気づかぬ無能力者と極めつけるものもある。[21] しかし彼においてはギリシア内部の問題に結着をつけることがペルシア対策の決め手となったのであるから、彼がギリシア内部の関係に大きなウェイトをおいているように見えるのである。くり返すがペルシアとその軍事力を熟知していたためにそれに対応する国内体制を完成することに重点をおき、ペルシアとは友好関係も敵対関係もない状態におくことを目ざした。これはペルシアの関心をギリシアに向けさせないためであった。しかしアテナイとペルシアが敵対関係にはいったため、ギリシア全体の覇権を握っていると自認していたスパルタもその勢力圏を自発的に縮少しそれをペロポネソスに極限せざるを得なくなった。このようにし

てクレオメネスはペルシアに備えながらも戦争をできるだけ避けることを目ざしている。ペルシアがギリシアへの攻撃姿勢を強めていた時、これに消極的な態度をとり続けたからこそペルシア軍のペロポネソス侵入は最後まで回避されたのである。クレオメネス一世が退位してのち十年ペルシア帝国は一たびギリシアに侵入しペロポネソス以外の地域を占領したが、これを撃退し得たのはこのようなクレオメネスの態度でギリシア人の余力が確保されたからである。このときスパルタ軍はテルモピュライでペルシア軍に破れたものの、遂にペロポネソスは一度もペルシア軍の侵入をうけることがなかったのはクレオメネスの防衛体制が成功したことを物語っている。

クレオメネスにはたしかにアテナイとアルゴスで瀆神行為があり、アルゴスに対する残虐な行動はあったが、精神錯乱者ではなく、ヘロドトスの伝える悲劇的な最後と結びつけて彼の功績を過小評価することは好ましくない。

註

① 拙稿「紀元前六世紀後半期スパルタの対外政策」（『大谷大学研究年報』第三十四〈一九八二年〉所収、一頁―四〇頁）

② エウセビオスがデイオドロスからの引用として伝える所謂 Thalassocracy-List によるとエーゲ海の制海権はサモスのあとラケダイモン（スパルタ）が五一七―一五年、ナクソスが五一五―〇五年の間握っていたことになる。

③ 前註②参照。

④ 前掲拙稿九頁参照。

⑤ その間の事情はヘロドトス V. 56-65. アリストテレス『アテナイ人の国制』XVIII―XIX に詳しい。

⑥ アリストテレス前掲書 XXI によればイサゴラスは五〇八乃至〇七年のアルコンであった。またアリストテレスはイサゴラスを「僭主の友」といっている。

⑦ S. C. Klein, Cleomenes: A Study in Early Spartan Imperialism, 1974, p. 176.

⑧ ヘロドトスはすでに V. 78 においてアテナイの強大化は独裁者からの解放によって実現したという見解を示している。

⑨ これをもってヒッピアス支配の当初はペイシストラティダイとアルクメオニダイとが friendship であったという。(cf. M. F. McGregor, 'The Pro-Persian Party at Athens. From 510 to 480 B. C.' in "Athenian Studies Presented to W. S. Ferguson", 1940, p. 73.)

⑩ 例えば I. 60-64; VI. 123. etc.

⑪ この間の事情は Hdt. V. 90-97 に詳しい。

⑫ E. M. Walker, 'Athens: The Reform of Cleisthenes' in C. A. H. Vol. IV. C. 6. p. 168.

⑬ Klein, op. cit., p. 223.

⑭ イオニア反乱に至るアリスタゴラスの行動は Hdt. V. 30ff.

⑮ Walker, op. cit., p. 169.

⑯ この際のアルゴスとの対戦については Hdt. VI. 76-81.

⑰ ミルティアデスは四九〇年にストラテゴスの一人となっている。

⑱ デマラトスが前王アリストンの子でなく、妻の先夫の子であるということはアリストン自身が時のエポロイに語ったという（Hdt. VI. 63）。デマラトスの出生についてはスパルタでもこの種の噂があったのではないかと想像される。ヘロドトス（VI. 69）によると、デマラトスがその母に直接聞いたところアリストンか英雄アリストラバコスかいずれかの子ということである。クレオメネスはこのような風聞を利用してデルポイのピュティアを買収し「デマラトスはアリストンの子ではない」といわせたのである（VI. 73）。

⑲ 前註⑱参照。

⑳ アルクメオニダイの親ペルシア傾向は、マラトンの戦いの際にこの一族のものがペルシアと通謀してペルシア軍を有利に導こうとしていたという噂を生み出している。ヘロドトス（VI. 121）は「真実とは考えられない」と述べているが、それが事実か否かは別として、アルクメオニダイに親ペルシア傾向があったのは確実と思われる。

㉑ 例えば A. H. M. Jones, Sparta. 1967. p. 55.

〈付記〉冒頭に触れたようにクレオメネス一世の治世の前半については、一九八二年の小論でいささか取り扱った。したがって前稿の第五章と本稿第一・二章とは内容的に若干重複するところがあることを申し添える。

（本学教授　西洋史学）